

心つないで

東日本大震災から2年

田んぼや民家の庭先に一辺四方ほどの青い樹脂製の袋が積まれていた。中に入っている大半は土砂だ。

福島第一原発から五十五キロ。福島県伊達市では今も除染作業が続く。削った表土は地域ごとの仮置き場が決まるまで自分で保管しなければならぬ。

「ずっとここに住んでいいのかな」。二人の子供を育てる調理師、佐藤敦子さん(四三)は心細く日々を過ごす。毎朝、テレ



「第二の故郷」春日井

不安な日々 寄り添う



犬の散歩をする佐藤さん親子。自宅近くにも、除染作業で削られた土砂が置かれている＝福島県伊達市で

■ 上 ■

けない。洗濯物を干すのは室内だけだ。

佐藤さんが暮らす町内では放射線量が局所的に高いホットスポットも見つかっている。市の全域が警戒区域や計画的避難区域から外れているが、

「データの放送で市内の放射線量と風向きを確認するのが日課。外出時はいつも簡易線量計を持ち歩いている。窓は極力開だ。

もどかしさは募る一方

震災直後から、不安を抱えていた。避難も考

え、震災から三カ月後の二〇一一年六月、山形県米沢市に家を借りた。「でも、簡単には出

られない学校になじめるだろう。長女で小学六年の絢音さん(一〇)と次女で四年の珠菜さん(七)が春日井市の市民団体「雨にも負けずプロジェクト」のキャンプに最初に参加したのはその年八月。佐藤さんが福島に残ると決めた直

後だった。プロジェクトは、子供たちを温かく迎えてくれる。そんな春日井を佐藤さんは「もう一つの故郷」と感じている。

田村さんをはじめ、多くのボランティアが子供たちを温かく迎えてくれる。そんな春日井を佐藤さんは「もう一つの故郷」と感じている。

「きょう」と感じていた。佐藤さんは、思い切り遊び、生きる喜びを感じてほしいと、二人の背中を強く押した。二人はその後も、夏、冬、春の長期休暇中に企画された春日井での四回のキャンプ全てに参加した。

◇ (磯部旭弘)

多くの命が奪われた東日本大震災から間もなく二年。今なお復興の道筋が見えない被災地を訪ね、この地域と縁がある人たちの思いを取材した。